

「西アジア先土器新石器時代石器研究者国際会議」 第8回ニコシア大会

長屋 憲慶

Conference Review: 8th International Conference on PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East
Kazuyoshi NAGAYA

キーワード：石器研究、先土器新石器時代、国際会議

Key-words: lithic studies, Pre-pottery neolithic period, international conference

1. はじめに

2016年11月23日から27日までの5日間、*8th International Conference on PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East* (PPN8) と題した西アジア先土器新石器時代の石器研究に関する国際会議が、キプロスのニコシア大学にて開催された¹⁾。本会は1993年に石器研究者の連絡会(workshop)として始まった。8回目を数える2016年ニコシア大会は、口頭・ポスターを合わせて85本²⁾の発表が並び、大御所から中堅・若手まで西アジアをフィールドとする石器研究者が一堂に会する希有な機会となっている。初日のオープニング・トークでは、イェール大学名誉教授フランク・ホール氏(Frank Hole)が、「The PPN Conferences since 1993」と題し、第1回(1993年)から第7回(2012年)までの歩みを紹介した。スライドからは、20名程の研究会規模でスタートした本会が、今日の大きな学会へと成長する様子が窺えた。毎朝8時半過ぎから遅いときには夜8時まで研究発表がおこなわれ、参加者たちは石器漬けの濃密な5日間を過ごした。日本西アジア考古学会からは、藤井純夫(金沢大学)、西秋良宏(東京大学)、有村誠(東海大学)、前田修(筑波大学)、長屋憲慶(金沢大学)、以上5名(敬称略)が参加し発表した。

2. セッション

発表の時代・地域・テーマは多岐にわたり、最新の発掘調査から得られた石器群の様相、技術研究の成果等が語られた(図1)。研究発表は9つのセッションに分けられた。また最終日の最終討論(Final discussion)にて各人の抱く興味や課題が話し合われた。筆者が個人的に興味深く聴いた研究発表と日本人参加者の発表の概要について簡単に振り返ってみたい。

- 1) Lithics in Social and Economic Contexts
- 2) Cyprus Focus

- 3) Technology and Specialization
- 4) Agricultural Practices and Use-Wear
- 5) Special Items
- 6) Continuities and Discontinuities
- 7) Towards the End of PPN
- 8) Interactions and Diffusion
- 9) Beyond PPN
- 10) Final Discussion

2-1. 南レヴァント乾燥域

今大会で印象的だったのは、近年の社会情勢の影響もあってか、従来から盛んだった肥沃な三日月地帯の研究に加えて南レヴァント乾燥域のとりわけヨルダンの発表の多さである(図2)。

藤井純夫氏は、2016年夏に実施されたヨルダン南部のハラート・ジュハイラ遺跡(Harat Juhayra)の発掘成果と石器アセンブリッジを紹介した。本遺跡はエル・キアム型やヘルワン型尖頭器が多数出土し、放射性炭素年代はPPNB前期(EPPNB)の早い段階を示す。この発見により、これまで疑問視されてきた南レヴァントEPPNB文化の存在が確



図1 発表風景(ニコシア大学)

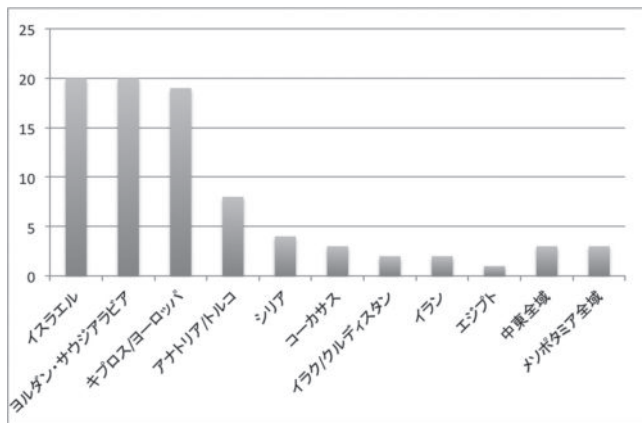


図2 対象地域別発表数

定し、尚且つその年代もレヴァント北部とほぼ同時（むしろ早い）ことが確認された。また、従来のEPPNB期の石器文化を再定義する必要性も述べられた。他にも、ベイダ遺跡 (Beidha)、フェイナン遺跡 (Feynan)、ハラネ4遺跡 (Kharaneh-4)、クライシン遺跡 (Kh-raysin)、ムシャーシュ163遺跡 (Mushash-163)、シュカラト・ムサイダ遺跡 (Shkarat Musaied)、シュバイカ遺跡 (Shubayqa) 等、ヨルダンの乾燥域出土資料を扱った発表が多くみられた。

2-2. コーカサス地域

西秋良宏氏は、アゼルバイジャン（南コーカサス地域）の新石器化について論じた。同地域最初の新石器文化は紀元前6千年紀のショムテペ文化 (Shomutepe culture) に求められる。石器の分析からは、同文化が肥沃な三日月地帯の農耕文化がそのまま伝わり成立したのではなく、先行する中石器文化との融合の末に発達したことを明らかにした。

有村誠氏は、同地域アルメニアの新石器時代遺跡の調査について報告した。同地域の新石器文化であるアラタシン・シュラヴェリ・ショムテペ文化 ('Aratashen-Shulaveri-Shomutepe' culture) の石器は、「クムロ・トゥール」 (Kmlö tool) と呼ばれる急角度且つ平行で連続的な押圧剥離による刃部を有する黒曜石製ナイフが特徴である。有村氏は、この石器とトルコの「チャユヌ・トゥール」 (Çayönü tool) との類似性を指摘し、両地域が同一の文化的伝統を共有していたことを示唆した。また、レヴァントやメソポタミアの様相とは異なり、同地域の新石器化が在地の後期旧石器時代的伝統に起因することを述べた。

ザグロス地域の研究では、西秋良宏氏が、イランの新石器文化ムレファティアン (Mlefaatian) の報告をおこなった。ムレファティアン石器群は1990年代後半にステファン・コズロウスキ (Stefan Kozłowski) により early; middle; post の3時期に区分され、押圧剥離による石刃・細石

刃に特徴付けられる。3期を通して徐々に幾何学石器と鎌刃の比率が高くなり、この変化が同地域の新石器化の進行を反映しているとされる。西秋氏は、ムレファティアン石器群を西部と南部の2地域に分けて比較し、上記変化が西部においてより早く起こることを指摘した。また新石器化の遅れる南部においては、多地域からの導入の可能性が示された。

2-3. 技術研究

各地域の石器製作技術に目を向けた研究も数多くみられた。メソポタミア地域では、フランスのイマード・アルフセイン氏 (Imad Alhussain)、フレデリック・アッベ氏 (Frédéric Abbès) が、シリアにおける単設・両設打面石核を用いた素材石刃の剥離概念を紹介した。道具素材に適した形状の石刃（発表では「Prédéterminéされた石刃」と表現）を剥離するために、計画的な石核の準備と調整がおこなわれていることを指摘した。また、こうした石刃剥離は肥沃な三日月地帯内部における新石器化と大きく関連していることが指摘され、また一方ではその外側である乾燥域の様相を今後把握していく必要性が述べられた。

イスラエルのオムリ・バルジライ氏 (Omry Barzilai) は、イスラエルおよびヨルダンの黒曜石製石刃を紹介した。上述のPrédéterminéされた石刃が南レヴァントの各遺跡の一部のキャッシュから道具に未加工のまま出土することから、極めて高い技能を備えた製作者が、言わば「渡りの職人」のように各地に技術を伝えたというアイデアを提示した。

筆者は、ヨルダン南部ワディ・アブ・トレイハ遺跡 (Wadi Abu Tulayha) とジャバル・ジュハイラ遺跡 (Jabal Juhayra) から出土した両設打面石核と石刃の接合資料の検討から、上記のような計画的に剥離された石刃とは対照的に、南レヴァントでは低い生産性および技術で石刃生産がおこなわれていたことを指摘した。また、この地域に広く分布するバーディア型尖頭器 (Badia point) について、こうした不定型石刃を素材とする一連の製作工程を提示した。

2-4. 鎌刃

尖頭器と並んで新石器時代の代表的な石器である鎌刃に関する研究には、1つのセッションが設けられた。たとえば前田修氏は、紀元前1万2千年から5千年までの道具アセンブリッジに占める鎌刃の比率 (277遺跡) と栽培型の穀物 (コムギ・オオムギ) の出土量 (65遺跡) の関係について定量的な分析をおこなった。肥沃な三日月地帯東部では穀物の形質的な変化が鎌刃の増加に対して遅れてやってくるのに対し、レヴァント地方では両者の変化がほぼ同

時に起こっているという興味深いデータが提示された。

また、フアン J. イバネス氏ら (Juan J. Ibáñez et al.) は、ナトゥーフ文化 (Natufian culture) から先土器新石器文化 B 後期 (LPPNB) までの出土資料にみられるシッケル・グロス (鎌刃光沢) と穀物収穫実験の成果を合わせ、時代の経過と共に熟した状態の穀物が収穫されるようになる傾向を明らかにした。

2-5. その他

開催地であるキプロスの研究については、特別にいくつかのセッションが設けられ当地の新石器化および石器群の様相が網羅的に紹介された。また、黒曜石や紅玉髓、特殊なフリントといった非在地系の石材原産地を探る発表もみられた。

3. 最終討論

学会は、最終討論という形で締めくくられた。参加者各々が現在の関心事を提案し、持ち上がった議題について意見が交わされた。主立った議論を以下にまとめてみたい。いずれの項目も問題提起に留まり、統一的な見解を得るに至ったわけではない。しかし、西アジア石器研究者が集まるこの場で各自の問題意識が共有されたことがむしろ重要であったと思われる。

3-1. 用語の統一と定義の明確化

最も多くの時間を割いて議論された。主に、1) 指標遺物と時期区分名称の定義、2) 石器名称/分類概念の明確な使い分け、が挙げられる。

PPN の各時期には、地域によって多少の違いはあるものの基本的に放射性炭素による絶対年代が与えられている。PPN とはあくまで年代の区分であり文化的なパッケージを指すものではないという考えのもと、指標遺物という用語の使用を避ける研究者も一定数存在する。しかし一方では、各タイプの尖頭器然りナヴィフォーム石核然り、我々はこうした年代の目安となる遺物の有無によって各時期を認識・区別しているのも事実である。また新発見があればその認識も改められ、別の統一した定義が必要になってくる。特に南レヴァント乾燥域においては、藤井氏の発表にもあったようにメソポタミア地域の種々の石器研究をベースに定義されてきた年代観に南レヴァント乾燥域のデータが溯るケースが出始めている。両者の矛盾をいかに解消して時期区分を統一・共有すれば良いかが議論された。

石器の呼称については、Naviform core、Bidirectional core、Bipolar core の使い分けや、先述の素材石刃の剥離

概念である「prédéterminé」の適切な理解などが挙げられる。これについては、伝統的なフランス式技術研究者と他の研究者たちとの間に認識の乖離があり、これを突き詰めていく必要性が述べられた。

こうした研究者間の理解・認識の相違を解消するには、石器用語辞典を作成すべきという意見が出た³⁾。辞典出版の意義として、特にオフェル バール＝ヨセフ氏 (Ofer Bar-Yosef) は、各研究者の成果が分立しまとまらない現状を整理するのみならず、「西アジア先土器新石器時代の石器研究」という総体を次世代に継承する重要性を強調した。ナイジェル ゴリン＝モリス氏 (Nigel Goring-Morris) 氏は、形態的に彫器として分類されてしまう単設打面細石刃石核の例や、石核が超大型礫の剥離物として接合する例を取り上げ、最終的形態の観察結果に過ぎない石器型式分類を技術研究の前提として扱うことの危険性を指摘した。またその他の提案としては、各地域の石器のデータベースを WEB 上で共有し、様相の違いや年代の整合性に関する理解を深めようという声も上がった。

3-2. 資料へのアクセスに関する物理的問題

現代社会情勢による原資料へのアクセスの困難や、一部の研究者しかアクセスできない図書資料の現状をいかに解消すればよいかという問題が挙げられた。これは特に、博士論文を最近執筆した若手研究者の多くが直面した切実な問題であるとされた。根本的な解決策は考古学の守備範囲外ではあるものの、上述のデータベースの構築・活用が再度提案された。

3-3. 石器原材料

地域によっても異なるが、非在地系の特殊な石材 (フリント、黒曜石、紅玉髓等) の原産地を、サーベイ等の考古学的手法と理化学的手法の双方から解明してゆく必要性が提言された。フリント熱処理の問題も同様に議論された。

4. イベント

今大会では初日の懇親会に加えて、考古学博物館の見学、石器作りの実演、遺跡見学のイベントが催された。

4-1. キプロス考古学博物館見学

学会 2 日目の午前中は、ニコシア市内の考古学博物館を見学した。学芸員による展示品の解説に加え、石器資料を手にとって観察する場も設けられた (図 3)。キプロス考古学博物館は先史からローマまでの展示品を有するものの、参加者のほとんどは入口付近の先史コーナーの石器だけを見学すると早々とコーヒー休憩に向かっていた。これ



図3 考古学博物館での資料見学

も石器専門の学会特有の風景かもしれない。

4-2. 石器作り実演

学会3日目の夜には懇親会の傍ら、3名のフランス人 (François Briois, Frédéric Abbès, Imad Alhussain) による石器作りの実演がおこなわれた (図4)。単設打面、両設打面石核を用いた石刃の剥離と、これを素材にした石鏃作りが披露された。参加者は各々グラスを片手に見学し、時折質問を投げかけながら技術研究への理解を深めた。

4-3. 遺跡見学 (エクスカーション)

学会最終日の27日は遺跡見学に充てられた。ソティア遺跡 (Sotira)、テナタ遺跡 (Tenta)、世界遺産のヒロキティア遺跡 (Khirokitia) の3カ所の新石器遺跡を巡った (図5)。

5. まとめ

最後に私見を述べたい。今回の学会は西アジアの石器研究の最新動向が多数紹介され、また若手の立場としては活字でしか知らなかった学史に名を馳せる面々の話を直に聞いた点で貴重な機会であった。

地域別の発表数をみると、開催地キプロスとイスラエル国内の発表を除けば、南レヴァント乾燥域 (ヨルダン・サウジアラビア) の発表数の多さが目を見張る。また「Beyond PPN」のセッション題目の文字通り従来研究の主要な対象ではなかったコーカサス地域の研究発表も一定数みられた。最終討論でも持ち上がった技術研究と関連づけてみると、こうした肥沃な三日月地帯の外側での研究の進展が、今後の西アジア石器研究に大きく寄与することが期待される。

これまでの西アジア先土器新石器時代の技術研究は、如何にして素材石刃を計画的に剥離したかに注目が集まってきた。したがって対象資料も自ずと出来の良いものに偏る傾向にあった。しかし実際には、石刃剥離技術の最高到達



図4 石器作り実演



図5 集合写真 (ソティア遺跡にて)

点とも呼べる「prédéterminé された石刃」が出土資料に占める割合はごくわずかである。また威信財のようにそれ自体に価値のある石器とは異なり、この時期の石器はあくまで実用の利器であり、必ずしも全てのハンター (石器製作者) が「prédéterminé」のコンセプトに則って理想的な狩猟具を製作していたわけでもないだろう。そのような意味において、当該期の石器文化あるいはそこに内在する製作技術の多様性を明らかにしてゆくことがこれからの石器研究の課題のひとつであり、データの増加が見込める乾燥域や周辺地域の研究成果がその鍵となってくると思われた。

研究上の課題は尽きることがないが、今回話し合われた事柄がどのような個々の成果となってまた次回2019年第9回大会で発表されるのか期待したい。最後に、今回の学会運営を指揮したニコシア大学キャロル マカートニー氏 (Carole McCartney) をはじめとする実行委員の方々へ感謝申し上げたい。

6. PPN9

次回 (PPN9) は、2019年に東京で開催されることに決まった。東京では翌年に56年ぶりのオリンピック開催を控える。考古学版「TOKYO世代」として、多くの若手の発表・運営参加を期待したい。

註

- 1) 第1回大会は西秋良宏氏 (1993)、第4回は前田修氏 (2003) によりそれぞれ概要が報告されているので参照されたい。

- 2) 数字は要旨集への投稿数。当日の発表キャンセル分も含む。
- 3) 石器用語辞典の出版は、第1回からすでに持ち上がっていた議題である (西秋 1993: 156)。

参考文献

- 西秋良宏 1993 「西アジア先土器新石器時代石器研究者連絡会」第1回ベルリン大会『オリエント』36巻1号 154-158頁。
- 前田 修 2003 「西アジア先土器新石器時代石器研究者連絡会」第4回大会『西アジア考古学』4号 125-126頁。

長屋 憲慶
金沢大学国際文化資源学研究センター
Kazuyoshi NAGAYA
Center for Cultural Resource Studies,
Kanazawa University